

フオイエルバッハの会通信 第95号

【文献紹介】

1. **Francesco Tomasoni, Ludwig, Feuerbach. Entstehung, Entwicklung und Bedeutung seines Werks.** Aus dem Italienischen übersetzt von Gunnhild Schneider. Münster u-a., 2015. (Internationale Feuerbach- forschung, Bd. 6) 448 Seiten, 68,00 €. ISBN 978-3-8309-3213-0

本紙前号で発行を予告したイタリアのトマソーニ氏による 2011 年刊行著書 (*Ludwig Feuerbach. Biografia intellettuale*. Brescia 2011) のドイツ語訳。ドイツ・ミュンスター大学に本部を置く国際フオイエルバッハ学会の叢書として出版されたのもっと手軽な本かと思っただが、現物が届いて驚いた。B 5 判 448 頁の大冊である。目次だけでも 6 頁ある。

序文

第一章 フォイエルバッハ家と家族

第二章 神学から哲学へ

第三章 生、死、ならびに不死性

第四章 本質、歴史、現存

第五章 個性と経験

第六章 キリスト教批判

第七章 ヘーゲルとの断絶と新しい哲学

第八章 宗教の本質と自然

第九章 回顧と自然主義的発展

結語

文献

索引

以上の目次から推察しうるように、本書はフオイエルバッハ哲学をその生いたちから没年まで順に追って解説・解釈したものである。ここでは、序文と結語の概要を紹介する。

フオイエルバッハの発展全体を包括的に概観することは、こんにち、かつて以上に困難ではあるが、その一方でその必要性は増大している。彼の未刊の遺稿やその他の文献が過去 50 年間に著作集として公開され、それによって旧来の図式的評価が疑問に付された。そこで決定的な役割を演じたのがヴェルナー・シュッフェンハウアーであり、彼が編集した全集で、のちの異文を加えたオリジナルテキストだけでなく、フオイエルバッハが若き私講師としてエアランゲンで行った講義や豊富な書簡も公開された。カルロ・アスケリによる刺戟も強力だったが、将来を嘱望されながらの彼の早世でそれは中断を余儀なくされた。多くの学者が歴史的研究や容易ならざる手書き文書の解読に取り組み、筆者（トマソーニ）も 1978 年以來フオイエルバッハ遺稿を解読する機会を得た。これによってフオイエルバッハの青年時代や中期活動についての知識が深められ、特定課題への分析も促進された。

研究状況も激変した。1973 年にビーレフェルトで開かれた最初の国際会議と 1989 年に開かれた第二回会議では、エンゲルスによるフオイエルバッハ解釈がまだお決まりで通っていたが、ベルリンの壁崩壊は、フオイエルバッハの発展と意義に関する判断に影響を及ぼしていた諸対立の克服を意味した。1920 年代にカール・バルトによって提起された弁

証法神学と第二バチカン公会議での世俗化問題以降、宗教を些細な問題とせず生涯に亘ってそれを分析した宗教批判家としてのフォイエールバッハへの関心が再度高まり、さらに彼の自然への注目も現在の意義をいっそう強めている。

ところで、もしひとがある思想家の意図や試みや変化を内部から明らかにしようと思うならば、その思想家の書簡や著作、そして未公開資料に取り組まなければならない。私は長年フォイエールバッハの手書き文書を重視し、彼の知的変遷を追ってきたが、その際助けとなったのが、哲学者は人間と不可分であり、彼の思考は文脈から切り離せないというフォイエールバッハの確信である。フォイエールバッハとわれわれとの間には共通の水準がある。それは、死や宗教、神、自然といった永遠の問題だけではなく、すでに彼によって明示されている現在の傾向性を含んでいる。一切を包括する体系の危機、新たな合理性への欲求、曖昧さを含んだ世俗化、危険を伴う技術力、独自の感受性と身体性の必然的奪回、起原と結びついた自然との関係性の変化、これらすべてをフォイエールバッハは独自の鋭い洞察を通して明らかにした。事物の尺度としての人間への彼のこだわりは、幻想に身を委ねずにこの地上で自らに与えられた課題を認識すべしという差し迫った要請と結びついている。これは人間の神化ではけっしてなく、自らの限界と可能性の指摘である。

フォイエールバッハの主張はある意味で逆説に満ちている。彼はなぜキリスト教を包括的に批判したあと 17 世紀の三位一体論に新たに集中して取り組んだのか。ユダヤ教を表面的に告発したあとで彼はなぜヘブライや聖書の研究にふたたび向かい、単語や歴史情報や文献学的註記をノートしたのか。いわゆる未開民族やオリエントの文化に深い真実を認めたとあとで彼はなぜ西洋文化に回帰し真実の自然科学的ないしは社会的な進歩を導き出そうとしたのか。こうした逆説は、ある場合には彼の立場に重要な変更をもたらしたが、他の場合にはそのまま制限としてとどめられた。こうした逆説があることを逃げ口上としない点に彼の偉大さがある。提起された問題とその解決策との不均衡という点でも彼は現代の子であり、したがって最深部において人間的であることを示している。

宗教に対する人間学の要請は、宗教的客体を心情や衝動の領域に制限することを意図するが、実存的な解釈をも導き出すのは願望と同様で、それによって、現実法則に立ち返ることは難しいが新たな次元と無限のユートピア空間を産み出す用意が整えられた。自然への根本的依存性の認識は、自然主義的な次元の不十分さを明らかにし、したがってまた、自然科学モデルや技術的实践を無条件に受け取ることの危険性を指し示している。人間は、自分がもはや宇宙の中心に立っているのではないことを理解しなければならない。だがまた人間は、地球と関連する無比の課題と責任を自らの前に持っているのである。

人間学的思考、道徳的参与、宗教に対する考えのうちにフォイエールバッハのアクチュアリティが存在する。諸々の宗教現象を区別を越えて統一的に考察するという彼によって提示された欲求が現代の知的対話のなかで現れるのはけっして副次的なことではない。いわゆる自然的諸宗教の解釈に対して彼が与えた衝撃は、こんにちでも議論されている人間学的ないし現象学的立場を先取りしている。未公開著作が、片手間になされたように見える主張の批判的な基礎を明らかにしている。彼が、思考と感情、実践と自然、自然科学と哲学、本能と意志、必然と自由、物質と主観性を効果的に相互に結びつけることができたか否かについては議論の余地があるだろう。だが、彼がその必要を感じとったことは事実である。彼の思考が活きているさまは、半世紀に現れかつまたいまでも現れている数多くの印象深い仕事から明らかである。そこから証明されることは、歴史的・哲学的研究方法は今日に根を下ろす対話ではあるが、それは昨日の多様性、個性、人格性を理解すること

を目標にしている、という点である。

2. モーレショット『わが友たちへ。人生の思い出 (Jacob Moleschott, *Für meine Freunde. Lebens-Erinnerungen. Gießen 1894*)

モーレショットは、1850年に自著『栄養手段論 民衆のための』を公刊した。フォイエルバッハがこれを絶賛する書評を書き、それ以来フォイエルバッハの晩年に至るまで、両者は書簡を通して深く交流した。

VI. Heidelberg.

Ludwig Feuerbach hatte mich, wie oben erwähnt, zwar schon erheblich früher beschäftigt, aber das Studium seines "Wesen des Christenthums" kam erst jetzt in mir zur Vergähmung. Ja, wie mir jetzt klar wird, da ich das Buch eifrig auf's Neue durchlee, habe ich seine mächtige Wirkung auf mich erst viel später ausgelebt, d.h. mir zu vollem Bewußtsein gebracht. Ich nannte "das Wesen des Christenthums", weil Feuerbach Ludwig Feuerbach ist, gerade weil er dieses Buch geschrieben hat.

Es wäre gewiß keine undankbare Aufgabe, wenn man es versuchte, die großen weltbewegenden Schriftsteller oder Wortführer mit einem einzigen von ihnen ausgesprochenen Satze der Welt zu bezeichnen. Von Feuerbach ließe sich sagen, er habe gelehrt, nicht Gott erschuf den Menschen, sondern der Mensch hat sich seinen Gott erschaffen. "Was für den Menschen wesentlichen Werth hat, was ihm für das Vollkommene, das Treffliche gilt, woran er wahres Wohlgefallen hat, das allein ist ihm Gott." "Gott ist der Spiegel des Menschen." Feuerbach führt mit sichtlichem Behagen die Worte des Originnes an: "'was Einer nur iimer über Alles Andere setzt, das ist sein Gott.'" - Er selber aber sagt: "Gott ist nicht um seinetwillen, sondern um der Welt willen da, um als die erste Ursache die Weltmaschine zu erklären."

so gelangt er geradewegs dazu, in Gott das Wesen des Menschen zu erkennen. "Homo homini Deus est" ist das berühmt gewordene Schlagwort, das wiederum als Feuerbach's Bildniß gelten könnte. S.172f.

ルートヴィヒ・フォイエルバッハはかなり以前から私の関心を引いていたことは確かだが、『キリスト教の本質』の研究が私の中で発酵したのはようやくいまになってからである。それどころか、いまわかったことだが、私がこの本を興味津々熱心に読み通したおかげで、彼の強い影響がようやくいまになって生きてきた。つまり、これを完全に自覚したのである。私は『キリスト教の本質』の名を挙げるが、それは、ルートヴィヒ・フォイエルバッハがフォイエルバッハだからであり、まさに彼がこの本を書いたからである。

Je mehr ich mich in die Anschauungen Feuerbach's vertiefe, je vollständiger, und meist mit seinen eigenen Worten, ich sie darzustellen suche, um so klarer wird mir es bewußt, daß sie mir in Fleisch und Blut gedrunge, daß ich mich ihrer nicht begeben konnte, auch wenn ich seine Schriften nicht unmittelbar vor Augen hatte. Es ist ein reines Glück, wenn man im Alter die Meister feiert, denen man in der Jugend gehuldigt hat. S.181

私がフォイエルバッハの諸見解に深入りすればするほど、それが完全になればなるほど、また、ほとんど彼自身の言葉で私がそれを叙述しようと試みればそれだけいっそう、私にとって明らかに意識されることは、それらの見解が私の肉となり血となっていること、たとえ私が彼の諸著作を直接目の前に所持していなくとも、私がそれを手放せないということである。若い時に敬意を払った師を老後のいま祝うことができるのはまったくの幸せである。

【お便り】

川本隆会員より

先週の土日〔6月6～7日〕は高野山大学（日本ヘーゲル学会）へ行ってきました。「ヘーゲルにおける宗教の本質と現代の人間」というテーマでのシンポに聴衆として参加しました。先月の日本哲学会大会（上智大学）では「ケア—共に生きる」というシンポがありましたが、両者に共通していたのが「宗教性」という問題でした。後者のシンポでは、終末期にある方々を30年ケアしてきた、上智大学の高木慶子さん（ゲストで招かれたシスター）が、具体的な何ごとにかかわる水平次元のほかに、自分を越えた大いなるもの（超越者、神聖なるもの）にかかわる垂直次元があり、後者がケアにおいては必要であることを強調されていました。日哲会員のほとんどは、このスピリチュアルなものを素直に肯定できなかつたようで、来世を信じられない人のケアも考えたい、といった意見が飛び交いましたが、すると、高木さんは「それで安らかに最期を迎えられますか？」と切り返しておられました。この問いかけが、印象深く残っています。両者の対立的緊張のなかに、フョイエルバッハの対話的視点が必要ではないかと感じたからです。ケアに限らず、エコロジー問題や、異文化交流の場面などでも「宗教性」はつきまとうものだと思います。対立から対話への転換、そのきっかけを作るものに、最近の私の関心は向いているようです。もちろん、シンポジウムの最後は、双方が歩み寄るような対話的雰囲気も垣間見られました。対立的なムードは主催者サイドの演出だったかもしれません。

ただ、先日、気になることがありました。経済学を教えている某先生との帰りの電車で、この話題に言及すると「来世なんて信じてない人のほうが大多数じゃない？」とおっしゃっていて、信者に対する煙たさのようなものを直観したことです。その先生がイケナイというわけではないのですが、諸先生のご意見を拝聴していて、ときどき「見えない壁のようなもの」を感じることがあります。学ぶこと・新しい知を発見することへの喜びを学生にも感じてほしいと述べる御説は至極ごもつともで、そこには共感を覚えます。ところが、いざ宗教（または信仰）の話題になると、「眉につばをつけて」構えはじめ、「敬して遠ざく」式の絶妙な間合いのとり方で、自らの基盤の安定を確保する、とでもいった姿勢が見え隠れすることがあり、私はここに妙な違和感を覚えるのです。

もちろん、逆また真なりで、信仰者（あるいは宗教的超越を重んじる論者）が無神論に「世俗化」の危険を察知して、超越的価値の引き下げを断じて拒否するという態度にも、同様の違和感を覚えます。「虫のいいことを言うな。おまえ自身はどうなんだ」といった声が聞こえてきそうですが、私が問題にしたいのは、「宗教」や「信仰」などのすれ違いに終わりそうな話題で対話状況を切り開くことはいかにして可能か、という点です。フョイエルバッハが真なるものを一つに纏め上げようとせず、楕円の「2点」をシンボルにしたことに、深い意味があるように思えるのです。

いわゆる「学知」と呼ばれるような客観性（あるいは絶対性）の境地は、人間に「誇り」の意識を抱かせるものですが、その誇りの意識を打ち砕く最初の躓きの石が「汝」「他の我」だとフョイエルバッハは言います。学知の最終到達点は絶対に正しいはずであるという「信」が想定外の壁を作ることがあり、（私も含め）地上に生きる人間はそうした「信」（自身はわかっていると思っていながら実は気づいていない主観性）からなかなか逃れられない、という含みが「誇りを打ち砕く躓きの石」という言葉に託されていないでしょう

か。37年の『ライブニッツ論』でクローズアップされる「他我」や「繊細な感覚」は、学知の「真」を絶対だと決め込む論客への警鐘でしょう。思考の反対党である「自然の声」を聞こうとする態度は、たとえ理不尽に見えたとしても自然に根ざしているかぎり「意味あるもの」として受け止めなおし受容する、という人間学的姿勢をとらせます。ただし、対話の方向性を人間精神が決められるわけではないという一点だけを強調すると、おそらく相対論に陥り、フォイエルバッハの求める方向から遊離していくことになりましょう。そこで、40年代以降のフォイエルバッハがこうした相対論を回避しようと追求していったものが「自然の先在性・根源性」だったのではないかと思います。人間が自然の子であり肢体であるという素朴な日常の事実（自然への依存性）を大事にし、心身の健康という土台の上で共同を模索してゆくという姿勢がフォイエルバッハ思想のシンボルである「楕円」に託されているのではないかと、ということです。

そういえば、高野山からの帰りの電車では、会員の池田成一さんとお話する機会があり、いろいろ勉強になりました。後期フォイエルバッハの「食」の原基的性格を重んじて、「見る」「聞く」よりも「食べる」「触れる」という感覚のほうが重要だという唯物論的な説などを拝聴しました。それもまた重要だなと感じます。ただ、そこからさらに進んで「観念論的思弁はもうイライナイ！」といった地点まで行くと、おそらくはいろいろな場面で対話状況の拒絶につながる気がします。見かけだけの対話で、実はすれ違いといった場面を招き寄せる可能性があります。これもまた危うい落とし穴ではないでしょうか。私から見て、信者の言い分も、非信者の言い分も、観念論者の言い分も、唯物論者の言い分も、それぞれ一理ありますが、一步間違えると対話拒否に陥る落とし穴があり、その落とし穴への警鐘をフォイエルバッハは鳴らしていたのではないかと思います。今回、新著を著したトマソーニさんは、フォイエルバッハ思想の全体に流れる逆説的問題性に早くから気づいていた人です。フォイエルバッハは唯物論的転回後に、古い着想を簡単に投げ捨てるような安易な批判家ではありませんでした。私の解釈では、フォイエルバッハの初期のまなざしは後期になっても持続しています。その逆説的な問題性に気づくことが重要というより、事あるごとに対話状況を開示するところの逆説的問題性に立ち返り、その対話的緊張の糸を断ち切らないように持続することが肝要なのではないかと、思うのです。フォイエルバッハ思想の放つ魅力の一つが、ここにあるとは言えないでしょうか。

以上、覚書として記しました。

(6月15日記)

【書誌情報】

柴田隆行「フォイエルバッハの実践（4）自然科学と革命」2015年5月31日、『季報唯物論研究』第131号、pp.150-159

【告知】

川本隆氏学位請求論文公開審査会のお知らせ

2015年7月4日（土） 東洋大学白山校舎6号館4階文学部会議室

13:30～15:30 川本氏内容説明、特定質問者との質疑応答、フロアからの質問と応答
論文タイトル「理性の神秘と自然の先在——初期フォイエルバッハの思弁的アプローチに関する一考察」

ニュルンベルクのルートヴィヒ・フォイエルバッハ協会主催行事

Ludwig-Feuerbach-Gesellschaft, Veranstaltungen und Termine im Jahr 2015

1. Treffen am Grab Ludwig Feuerbachs zum 211. Geburtstag am Dienstag,

28. Juli 2015 um 17.30 Uhr im Johannisfriedhof Nürnberg.

Mitglieder und Freunde der Ludwig-Feuerbach-Gesellschaft Nürnberg e.V. treffen sich am Grab Ludwig Feuerbachs - nach einer kleinen Gedenkrede über Gedanken des Nürnberger Philosophen ist ein geselliger Meinungsaustausch in der Gaststätte an den Hesperiden-Gärten geplant. Gäste, die sich für Ludwig Feuerbach interessieren, sind herzlich willkommen.

2. Einladung zum Tagesseminar der Ludwig-Feuerbach-Gesellschaft

am Samstag, 24. Oktober 2015 in Nürnberg

Auch im Jahr 2015 führt die Ludwig-Feuerbach-Gesellschaft in Nürnberg im Seminarraum des NHG (2. OG) wieder eine Veranstaltung mit mehreren Vorträgen durch. Themen und Referenten zur Philosophie und Leben Ludwig Feuerbachs werden wir hier in Kürze vorstellen.

【余白】



Bruckberg の地図。右上フォイエルバッハの旧宅



事務局から

* 本紙は季刊発行です。次は9月発行予定です。ぜひ情報やお便りなどをお寄せ下さい。

* 年会費 500 円。郵便振替 00160-1-84468 「フォイエルバッハの会」。

* 本紙は、発行後約2週間後に下記ホームページにて pdf 版で公開します。

〈事務局連絡先〉

112-8606 文京区白山5丁目28-20

東洋大学社会学部柴田研究室気付

tamast@toyo.jp

フォイエルバッハの会

<http://www2.toyo.ac.jp/~stein/fb.html>